



泉鏡花 夜叉ヶ池

小川未明 赤いろうそくと人魚
武者小路実篤 久米仙人

2009年

7月25日(土) 16時開演

7月26日(日) 13時開演

会場 一心寺シアター倶楽

朗読劇団
朗読 GEN 第7回定期公演

2009年度 次回公演のお知らせ

12月12日(土) 14:00開演
中宮サロン第37回例会
岡本綺堂「経帷子の秘密」ほか
チケット/500円

枚方市サンプラザ生涯学習市民センター・視聴覚室
サンプラザ3号館5階 TEL.072-846-5557
・京阪枚方市駅、東口改札口を出て右へ徒歩2分

お問い合わせ・ご予約
中宮サロン藤津/TEL&FAX.072-840-3435

朗読 GEN に入って 一緒に朗読を 学びませんか!

全くの初心者も、少し習ったのでもう少し深めて
みたいと思っておられる方も、ぜひ一度見学に
来てください。きっと楽しさがわかります。
朗読劇の舞台に立ちたい方も、スタッフとして
活躍して下さる方も歓迎します。

お問い合わせは・・・
秋山 (TEL & FAX 0742-48-8688)
または
辻本 (yumi-sab@view.ocn.ne.jp)

■お問い合わせ、チケットのご予約は

FAX : FAX専用06-6691-0569(清水)

ホームページ : 朗読GEN <http://book.geocities.jp/roudokugekidangen/2008/>

メール : roudokugen@yahoo.co.jp 電話 : 0742-48-8688(秋山)まで

ごあいさつ

本日はお暑い中、ご来場頂きまして、誠にありがとうございます。
 今年も一心寺シアター倶楽で定期公演が出来ますのも何より皆様のお陰
 と心より感謝申し上げます。「そろそろと思っただけに楽しんでいました
 よ。」というお便りを下さる方があります。まことに有り難く、嬉しく、
 苦しい稽古も乗り越えられる原動力になっていきます。
 今年は文芸作品ばかり3作に挑戦しました。これがとても難しく今まで
 で一番難儀なことになったと、正直途方に暮れました。やはり私たちには
 コメディがないといかんのかと……。しかし、原作の心を大切に演じる
 という朗読GENの活動の根幹を改めて思い出し、稽古を続けて行くうち
 に作品の美しさに惚れ惚れとするようになりました。「品良く」と言う言
 葉が死語のような世の中にあって、これぞ「真、善、美」の世界といえる
 作品に触れるのは、魂を洗われるひとときになるでしょう。悩み、迷いが
 いかにも人間にとって大切なことを思い出させてくれた物語の中へ今から
 皆様をご案内致します。

どうか最後までご覧下さいませようお願ひ申し上げます。

演出・秋山 太加

久米仙人

仙人……………福嶋 左知子
 語り……………田中 章恵
 女 達……………秋山 太加
 ………………垣内 浩子
 ………………太田 淑子
 ………………木村 幸子
 ………………山岡 くみ子

スタッフ

構成・演出……………秋山 太加
 舞台監督……………佐野 泰広
 照明……………加藤 直子
 音 響……………西角 秀紀
 音響オペレーター……………中野 千弘
 衣裳プラン……………秋山 太加
 衣裳制作……………青柳 秀子
 ヘアメイク……………森安 貴子
 宣伝デザイン……………桂 瑞子
 制作……………うらきみこ
 ………………丹原 祐子
 ………………(劇団P・T全連)

夜叉ヶ池

萩原 晃……………辻本 由美
 百 合……………秋山 太加
 山沢学円……………田中 章恵
 白雪姫……………垣内 浩子
 湯尾峠の万年姥……………横上 嘉伝次・与十
 ………………清水 光恵
 鯨人 鹿見宅福……………太田 淑子
 鯉七……………福嶋 左知子
 蟹五郎……………穴頭 鉦蔵……………山岡 くみ子
 木の芽峠の山椿……………齊田 初男
 ………………木村 幸子

記 録……………小島 知光
 協 力……………上田 蜜柑……………久米 裕喜代
 ………………田中 仁美……………西野 幹雄

魚井 恵子……………伊東 香織
 家石 貞子……………杉本 レイコ
 森安 紀美子……………M I Y A
 世良 恭子……………岡田 真理子
 川崎 祐子……………堀川 希絵

キャスト

赤いろうそくと人魚

おじいさん……………山岡 くみ子
 おばあさん……………木村 幸子
 人魚母……………辻本 由美
 人魚娘……………清水 光恵
 香具師……………太田 淑子
 語り……………垣内 浩子
 ………………田中 章恵
 ………………福嶋 左知子

夜叉ヶ池

龍神が住むという夜叉ヶ池の麓、越前鹿見村琴弾谷にひっそり暮らす鐘樓守の夫婦がいた。村人はかつて、池の主の白雪姫（龍の化身）と日に三度鐘をつく約束を交わした。もし掟を破れば、村はたちまち水の底に沈むという。夜叉ヶ池を見ようとやってきた京都大学の教授、山沢学四はその夫を見て驚く。彼は学四の友人で行方不明になった貴族の三男、萩原晃であった。晃は民話の採集のため訪れたこの村で行きがかり上、鐘つきを引き受けることになり、その折り出会った村の娘百合と暮らしていた。百合は村人から蛇体かも知れぬと噂される不思議な娘。

再会を喜び、学四と晃が二人で夜叉ヶ池に出かけたその夜、百合は人形を抱き子守歌を唄いながら寂しく二人の帰りを待っている。

一方池の主の白雪は恋人、剣ヶ峰千蛇ヶ池の若君に会いに行こうとするが万年姥始め、眷属たちに止められるやがて、日照りに苦しむ村人は百合を雨乞いの生け贄にとやってくる。百合の唄う子守歌に里心が湧いた晃と学四がそこに帰ってきて……

泉鏡花

明治6、昭和14(1873、1939)

石川県金沢市生。父は彫金師、母、鈴は、加賀藩お抱えの能楽の大鼓師の娘であった。

鏡花世界



「鏡花世界」という言葉がある。泉鏡花の文学の放つ独特の境地を意味する。神秘、幻想、艶美、脱俗、非合理、といった浪漫的、超現実的な境地である。一般的な現実界と別の次元にある世界である。だいたいの作家はその個性が強ければ強いほど、その作家独自の世界を持つものであるが、それにしては近代作家のなかで、鏡花のようにその名を冠した作家の世界を固有名詞のように呼ばれる人はいない。

(筑摩現代文学大系2)

この独自の、夢想自在の、魔性の世界に惹きつけられる人々は現在でも多く、歌舞伎や、演劇に取り上げられ、人気が高い。歌舞伎や映画で鏡花世界のヒロインを演じた板東玉三郎は、自ら監督として「天守物語」「外科室」など、鏡花の美にこだわりの、詩情溢れる映画も撮っている。このように今も私たちの心をとらえ続けているのはなぜだろう。武者小路実篤が忘れ去られた作家になりつつあると或る本に書かれているのと対照的である。

一般の人には、鏡花の在り場は、別の次元と見られるが彼自身にとってはそれが日常の在り場である。彼の至極当然な日常生活も、多くの一般の人が見ると奇異なも

母の兄、松本金太郎は当時名の高い能楽師である。父も鼓を能くした。明治15年、29歳の若さで母鈴が亡くなる。この美しい母を早く亡くしたことは後の文学に大きく影響する。近所の湯浅時計店の娘しげ子、従姉の目細てる子に可愛がられた。彼女たちはその後小説のモデルとして登場する。明治20年、金沢専門学校(現金沢大学)を受験するも失敗。22年尾崎紅葉の「二人比丘尼色懺悔」に感動し、小説家になるべく上京。しかし、紅葉を訪ねる勇気がなく、先輩の使い走りなどで食いつなが、ついに24年紅葉を訪ねる。意外にも入門を許されるが、27年父が病死し帰郷。手紙を師に書き送ったところ紅葉より励ましの手紙とお金が送られてきて再び上京。32年、生涯の伴侶伊藤かずと知り合う。神楽坂の芸妓との結婚は紅葉の反対にあり、この経緯は小説「婦系図」となり、新派劇の名セリフ「俺を捨てるか、婦を捨てるか」が生まれた。半年後紅葉は世を去り、正式にすずは妻となる。その後自然主義文学が隆盛となり、しばらく文壇中央より遠ざかっていたが、その後43年「歌行燈」でカムバックする。39年7月健康を害したため三浦半島逗子に借家住まいする。ここでの体験が背景となったのが「草迷宮」である。42年に反自然主義を掲げる文芸革新会に入り、作家生活を続け、大正14年には全集が刊行された。

のになる。佐藤春夫が子供のの名を聞かれ、座布団に指で書いた時「人の尻に敷く」と強くのがめられた話や、中河与一が、短冊を所望し念願をかえしたが、「時々書いた自分の字を見たくなるから、電報を打たうすぐ持参してくれ」と云われた話など。こうした巷談は鏡花の文字への愛惜を物語る。また雷が恐くて出かける時も先方に蚊帳があるかが気になったというし、どうも3階から上には妖怪が住んでいたと思っていたらしい。超自然力を信じる宗教心と芸術性が合体したのが代表的傑作「高野聖」であろう。精神医学的には強迫神経症などと見られるかもしれないが作品には今も読者をとらえて離さない筆力と、神秘的な鬼気がちのほるのである。

【参考文献】

- 新潮日本文学アルバム 泉鏡花 新潮社
- 人と作品 泉鏡花 清水書院
- 泉鏡花全集 岩波書店
- 筑摩現代文学大系2 筑摩書房
- 筑摩現代文学大系19 筑摩書房
- 小川未明童話集 新潮文庫
- 百年小説の楽しみ 新潮社
- 日本児童文学大事典 大日本図書
- 新潮日本文学辞典 新潮社
- 日本近代文学大事典 日本近代文学館

泉鏡花・作品年表

西暦	年号	年齢	作品名
1873	明治6		金沢市に生まれる
92	25	20	「冠弥左衛門」京都日々新聞
94	27	22	「義血侠血」読売新聞
95	28	23	「夜行巡査」文芸倶楽部 「外科室」文芸倶楽部 この頃より新進作家として知られるようになった
96	29	24	「照葉狂言」読売新聞
97	30	25	「化鳥」新書月刊 鏡花最初の口語体小説
99	32	27	「湯島詣」春陽堂
1900	33	28	「高野聖」新小説
04	37	32	戯曲「深沙大王」文芸倶楽部
06	39	34	「通夜物語」大阪朝日座初演 「湯島詣」同座初演 「春昼」「春昼後刻」新小説
07	40	35	「帰茶園」やまと新聞連載
08	41	36	「帰茶園」新富座初演 「草迷宮」春陽堂
10	43	38	「歌行燈」新小説
13	大正2	41	戯曲「夜叉ヶ池」演芸倶楽部 戯曲「海神別荘」中央公論
14	3	42	戯曲「深沙大王」明治座初演 「日本橋」千草館
15	4	43	「桜心中」新小説 「日本橋」本郷座初演
17	6	45	「天守物語」新小説
24	13	52	「扇かくしの霊」苦楽
26	昭和元	54	「歌行燈」明治座初演
36	11	64	戯曲「お忍び」中央公論
37	12	65	「薄紅梅」東京日々新聞 帝國芸術院会員となる
39	14	67	肺腫瘍にて逝去

赤いろうそくと人魚

身もちの人魚は、この世の中で一番美しく美しいと信じた人間界に我が子を産み落とす。信心深いろうそく屋の老夫婦に大事に育てられた人魚は美しく成長する。ある日、香具師が大金を持って人魚を売ってくねとやってくる。「人魚は不吉だ」と言われ、大金にも目がくらんだ老夫婦はついに人魚を売り飛ばしてしまふ。
(香具師：綿目を路上で見せ物をしたり粗製品を売る職業の人)

小川未明

明治15、昭和136
(1882、1961)

新潟県高田町に生まれる。(現上越市)父澄晴は修験者で、春日山に上杉神社を創建したので中学在学中に一家はその地に移り住んだ。中学を中退して上京、早大予備校に入り、専門部英文哲学科を経て明治38年、大学部英文科を卒業。在学中坪内逍遙の指導を受け、また小泉八雲の講義を聞き、卒論にハーン論を書く。明治39年、早稲田文学社に入り、島村抱月の指導のもと、「少年文庫」を編集。新しい童話運動を起こそうと多くの童話、童謡を書く。日本最初の創作童話集「赤い船」を刊行。大正10年、代表作「赤いろうそくと人魚」を朝日新聞に書く。昭和21年、児童文学者協会創立。初代会長となった。

久米仙人

地上の生活、つまり人間でいることが嫌になった久米の仙人は、自分を生きたまま不死のものにし、天人界に入ることを望んだ。彼はついに雲に乗って天上界へ進んで行った。が、ここに不思議なことが起こった。それは地上をいよいよ離れると云う時だった。……

武者小路実篤

明治18、昭和51 (1885、1976)

東京麹町に、子爵武者小路実世の第8子として生まれた。父は彼が2歳の時に亡くなり、実生活では質素な家庭であった。学習院高等科1年の夏、聖書やトルストイの思想に影響を受ける。明治39年、東大社会学科に入学するも1年で中退、文学に専念する。43年4月「白樺」創刊。トルストイ主義の克己、禁欲、自己犠牲の殻を破り、独自の見解によって個性の欲求を大胆率直に肯定した。

しかし彼のエゴイズム肯定の下にはヒューマニズムの基体が横たわっていた。「自分」は一言で言えば、芸術のために自分の一生を捧げることに出来ない人間だ。「自分の筆でする仕事」と書いたり、「自分の自」は文芸の仕事を外にして自己を生かす道

久米仙人一口メモ

平安時代の説話集「今昔物語」の話をもとに書かれた。吉野の寺に籠もって修行していた男が仙人になり空を飛行中、川のほとりで洗濯している女のふくらはぎにと目を奪われ落ちこち、その女と命をもらった。都造りの人夫となり命をもらい、寺を建てたという。縁の寺久米寺は近鉄橿原神宮駅近くにある。

白樺派

同人誌「白樺」を中心として、徹底した自由主義、個性尊重を唱えた。関東大震災で廃刊するが14年間、160冊を刊行。戦前の同人誌で最長の寿命を保った。それは同人が学習院出身で「友達既濁(里見淳)」と言うほど交流が盛んで深かったからである。同人は華族や実業家の子弟で、経済的に恵まれ、生活を考えずに文学に打ち込む事ができた。美術も重視し、ロダン、セザンヌ、ゴッホなどを日本に紹介した。また実篤が「新しき村」を創設したことが大きく取り上げられた。

新しき村

ヒューマニズムの理想を実現するために大正7年建設に乗り出した生活共同体の村。現在の宮崎県児湯郡木城町にある。夫妻は15年まではその地に定住した。

を知らない」「(文芸の仕事)」と書くなど、生涯、矛盾と反転を繰り返している。

